

主 題：神の約束は必ず成る

聖書箇所：ローマ人への手紙 10章18-21節

「信仰は聞くことから始まる」とパウロはそのように教えてくれました。このすばらしい救いを主からいただくためには、私たちは救いのメッセージをしっかりと聞かなければいけません。パウロはすでに私たちに、「主イエス・キリストがいったいだれであり」、「あなたのためにいったい何をしてくださったのか」、そのことを知らなくてはいけないと言いました。主イエス・キリストはあなたの罪を負って十字架で死んでくださり、そして、約束通りに三日後によみがえってくださった救い主です。そして、神です。すべての主であります。私たちはその救いのメッセージをただ聞くだけで良かったのでしょうか？それでは不十分でした。私たち自身がその主を、この救いを自分のものとして心から受け入れることが必要でした。感謝なことに、私たちは神のあわれみによってこの救いに与りました。このすばらしい救いを神からいただいたのです。そして、このすばらしい救いはすべての人に提供されているにもかかわらず、悲しいことに、多くの人々がこの救いを逃しています。

パウロは10：16で「すべての人が福音に従ったわけではありません。」と言いました。まさに、そのような悲しい現実があるのです。こんなにすばらしい救いが神によって備えられたにもかかわらず、その救いを拒んでいる人々、そして、悲しいことに、それゆえに、今永遠の地獄へと向かっている人々がこの地上には溢れているという現実です。パウロは特に、イスラエルの不信仰を責めて来ました。ユダヤ人たちが神のすばらしい救いのメッセージを聞いていながらそれを拒んでいるという、その不信仰を責めました。なぜ、彼らはこのすばらしい救いを、救い主を、主を拒み続けるのでしょうか？そのことについてパウロは、今日見て行こうとしている10：18-21のみことばを通して、私たちにその理由を教えてください。

☆なぜ、イスラエルはすばらしい救いを拒んだのか？

よく考えてみると、イスラエルだけでなく、私たちもこの救い主を拒むときに様々な口実を設けます。イスラエルはみことばが教えるように「聞いたことがなかった。知らなかった。」と言います。このような口実はどこかで聞いたことはありませんか？「救いのメッセージなんて聞いたことがない。イエスによる救い？知らなかった。」と。今日、私たちはローマ10：18から、イスラエルの不信仰を通して、主の救いを拒むことがいかに愚かで、いかに大きな罪であるかということをごいっしょに見て行きましょう。今話したように、18節と19節のみことばは二つの口実を私たちに示しています。

18-19節「でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」：19でも、私はこう言しましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」、この箇所を見て気付かれたように、パウロはここで修辞疑問文を使っています。反語です。そして彼は、彼らが確実にこの救いのメッセージを聞いていたこと、彼らは神のメッセージをちゃんと知っていたことを明らかにするのです。どんなに言い訳をしても、彼らはメッセージを聞いていたし、神のメッセージを知っていた、どのような言い訳をしても、この事実を曲げることはできないとパウロは言うのです。

A. 「聞かなかった」 18節

「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」、つまり、彼らは福音を聞くことがなかったのか？と言います。もちろん、彼らは福音を聞いていました。パウロはそのことを明らかにするために、旧約聖書の詩篇19篇のみことばを引用するのです。

1. 一般啓示

この箇所は皆さんがよくご存じのみことばです。というのは、1節にこのように記されています。「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」と。この19篇は神がお造りになった宇宙、この世界、つまり、被造物が神のことを明らかにしていると言います。これを一般啓示と言いますが、そのことが記されているところです。神のことをすべて知ることはなくても、またできなくても、神がおられることや、神のご性質について私たちは少し知ることができます。美しい自然界はそれを造られた美しい神を私たちに示してくれます。そこに存在する不思議は私たちにそれをお造りになった神の知恵を教えてください、また力を教えます。

パウロはローマ人への手紙1章ですでにそのことを私たちに教えてくれました。1：19-20「なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。：20 神

の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」、ですから、神がお造りになったこの自然界を見る時に、私たちは神がおられること、そして、神について少し知ることができるのです。一般啓示によって私たちは神のことを少しは知ることができるのです。ジョン・カルヴァンはこのように言います。「神は世の初め以来、すでにその神性を異邦人に示して来られた。それは人間の携わる宣教によらなくて、神はこれを被造物の証を通して成し給うた。」と。神はお造りになったものを通してご自身を明らかにしておられるのです。恐らく皆さんも、例えば、農業に携わっておられるとか家庭菜園をしておられるなら、自然と触れるわけで、そこに存在する神のすばらしさに気付きます。種を蒔いて野菜が育って行く過程を見るだけでも、これは偶然にできるのではないこと、その背後にそれらを司っている存在があると思うはずで、イエスを信じていない方々からそのようなことを何度も聞いています。なぜなら、聖書が教えるように、確かに、神がお造りになった自然界はご自身のことを明らかにしておられるからです。

ですから、パウロはこのイスラエルの人たちはみんな知っている、聞いていなかったということなどあり得ない、なぜなら、この自然界の一般啓示をもって神はご自分のことを明らかにしてくださったからと言うのです。

2. 福音が異邦人に届いているという事実

また同時に、イスラエル以外の人々、つまり、異邦人が救いへと導かれていることです。なぜですか？彼らは福音のメッセージを聞いたからです。だから、異邦人が救われているという現実が私たちに明らかにすることは、メッセージはちゃんと届いていたのです。人々はこの救いのメッセージを聞いていたのです。ローマ書10章に戻って、18節には確かに、日本語では「響き渡り」、また「届いた」と動詞が二つ使われているようですが、同じ一つの動詞を使っているのです。そして、その時制はもうすでにそのことが起こってしまったという事実を明らかにしています。継続ではないのです。

そうすると、この福音のメッセージがもう全世界に届いたこと、地の果てにまで届いたということ、パウロは詩篇19篇のみことばを引用することによって明らかにしようとしたことが分かります。このように考えた時に出て来る疑問は、では、パウロは世界中のすべての人々がこの福音のメッセージを実際にもう耳にしたということを行っているのかどうかです。なぜなら、今から約二千年前の話です。その時代に果たしてキリスト教のこの福音が世界中のすべての人の所に届いていたのでしょうか？現実には今でも世界中のすべての人には届いていないのです。二千年前にパウロはそのことを知らなかったのでしょうか？パウロ自身がここで語ったことは、そのように地理的に福音がすべての所に届くということではないという証拠が出て来ます。

同じローマ人への手紙15章23節を見ると、パウロはこのように言っています。「今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行くばあいは、あなたがたのところ立ち寄ることを多年希望していましたので、」と、「イスパニヤに行く」と言っています。スペインです。パウロはスペインに出て行って、そこでこのキリストのすばらしい福音を伝えようとしていたのです。そこにはまだ福音が伝わっていなかったからです。ですから、明らかに、10:18で言われていることは、地理的に世界中のすべての人々がキリストの福音を聞いたと言っているのではないのです。ここでパウロが語っていることは「恩恵の広がり」のことです。福音の恩恵を受ける対象についてのことです。ジョン・マレーという神学者は「福音に与る特権がすべての国民に及ぶこと、それを言っている」と言います。

パウロはここで、一般啓示がそうであるように、福音の恵みがすべての人々に与えられるということ語りたかったのです。

- ・一般啓示は、差別なく世界中のすべての人々に神のことを示しています。
- ・福音も同様に、差別なくすべての人々に救いを提供しているのです。しかも、福音はユダヤ人から始まって異邦人へと広がって行きました。救いの恩恵は確かにすべての人々へと広がって行きました。初めは、ユダヤ人だけでした。「使徒の働き」を見ると、福音は最初にユダヤ人に語られました。そして、神が異邦人に門戸を開きました。ペテロは戸惑いました。でも、神がペテロを用いてコルネリオが救われました。異邦人が救われていったのです。使徒たち、ユダヤ人たちはみなエルサレムに集まって会議をしました。その結論は「神は異邦人にも救いを与えられた。」です。

ですから、パウロがここで言わんとしたことは、福音が地理的に伝わったということではなくて、福音の恩恵がすべての人々に及ぶようになったということ、だから、このメッセージはユダヤ人にも届いていて、彼らはそのメッセージを聞いているから、「聞いていなかったから信じられない。」という言い訳はできないということをパウロは言わんとするのです。私たちが考えることは、では、なぜ彼らはメッセージを聞いていながら、それを信じることがなかったのかということ、パウロは後で、

何度もそのことを繰り返すのですが、イスラエルの人々が神の救いのメッセージを聞いていながら救いに与らなかつたその原因は、彼ら自身にあるのです。イスラエルはこの救いのメッセージを自らの意志でもって拒んだのです。私たちがすでに見たように、9：32でパウロはこのように言いました。「なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」と、提供されたのは自分たちの考える救いではなかつたのです。この世に来られたのは自分たちが考える救い主ではなかつたのです。それで、彼らは救い主に、このメッセージにつまづくのです。また、10：3に「**というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかつたからです。**」とあるように、自分たちの考えで自分たちを救おうとしていたのです。ですから、神の救いに関して、彼らは心を開くことがなかつたのです。彼らはこの救いを受け入れたくなかつたのです。

B. 「知らなかつた」 19－21節

18節と同じようにパウロは彼らは知っていたということを確信しています。このイスラエルの人々がある大切な真理を知っていたことをパウロは確信しています。ですから、反語によって「**はたしてイスラエルは知らなかつたのでしょうか。**」と言って、ちゃんと知っていたと言います。では、イスラエルの人々は何を知っていたのでしょうか？それは、今自分たちの周りで起こっている救いに関する出来事を知っていたのです。つまり、こうしてイスラエルの人々だけでなく異邦人が救いに含まれていること、また、自分たちがこの救いを拒んでいるという現実、それを知っていたというのです。そのことは旧約聖書に預言されています。

パウロはそのことを二人の証人を使って説明しようとしています。モーセであり、イザヤです。彼らはこのイスラエルの民に非常な尊敬を得ていました。そこでパウロは彼らを使って、彼らの時代から今あなたたちが直面していること、今あなたたちがしていることは預言されていた。その預言の成就であることを明らかにするのです。

1. モーセ 19節

申命記32：21のみことばを引用しています。「**彼らは、神でないもので、わたしのねたみを引き起こし、彼らのむなししいもので、わたしの怒りを燃えさせた。わたしも、民ではないもので、彼らのねたみを引き起こし、愚かな国民で、彼らの怒りを燃えさせよう。**」、なぜ、このみことばを引用したのでしょうか？実は、モーセがこのみことばを記したときに、イスラエルの人々は主に対して罪を犯していたのです。イスラエルの人たちは主に対して不真実であり、そして、よこしまな行為を行なっていたのです。それが咎められていたのです。まさに、このローマの教会はそれと同じ状態にあったのです。そこでパウロはモーセが語ったことを引用して、今起こっていることはすでに神が預言していたことだと彼らに改めて教えるのです。

(1) 異邦人の救い

彼は言います。「**異邦人の救いは、ちゃんとみことばの中に約束されていたことだ。**」と。覚えていますか？皆さん。神はアブラハムに契約を与えられました。創世記12章にアブラハムに与えられた契約が記されていますが、そこにはこのように記されています。12：1「**その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」**、そして、3節には「**あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。**」とあります。神の祝福はイスラエル民族に限定されたものではなかつたのです。すべての民族が祝されると、神の祝福が異邦人に及ぶことをこのようにみことばは明らかにしているのです。あなたたちはそのことを知っているでしょう？旧約聖書の創世記の中に記されていることだから、と言います。

(2) イスラエルの救い

また同時に、イスラエルに対する祝福も記されています。モーセはそのことを出エジプト記の中に記しています。19：5－6「**今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。：6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。**」、彼らは選ばれた民なのです。そのこともみことばが約束していたことです。

(3) イスラエルの反抗

そして、申命記31章を見ると、イスラエルが神に反抗するということが記されています。このように見ると、先ほど見たモーセが記したみことば、創世記にしても出エジプト記にしても、そして、申命記にしても、このローマ書が記される約千五百年前に記されたそのモーセのメッセージの中に、救いは

ユダヤ人だけでなく、異邦人にも与えられること、しかも、イスラエルがこの救いのみわざに反抗するという、それも記されていたのです。神はそのことを前もって明らかにされたのです。なぜなら、神はすべてのことをご存じだからです。申命記3 1章 16節から22節のみことばを見てください。

「16 主はモーセに仰せられた。「あなたは間もなく、あなたの先祖たちとともに眠ろうとしている。この民は、はいつて行こうとしている地の、自分たちの中の、外国の神々を慕って淫行をしようとしている。この民がわたしを捨て、わたしがこの民と結んだわたしの契約を破るなら、17 その日、わたしの怒りはこの民に対して燃え上がり、わたしも彼らを捨て、わたしの顔を彼らから隠す。彼らが滅ぼし尽くされ、多くのわざわいと苦難が彼らに降りかかると、その日、この民は、『これらのわざわいが私たちに降りかかるのは、私たちのうちに、私たちの神がおられないからではないか。』と言うであろう。18 彼らがほかの神々に移って行って行なったすべての悪のゆえに、わたしはその日、必ずわたしの顔を隠そう。19 今、次の歌を書きしるし、それをイスラエル人に教え、彼らの口にそれを置け。この歌をイスラエル人に対するわたしのあかしとするためである。20 わたしが、彼らの先祖に誓った乳と蜜の流れる地に、彼らを導き入れるなら、彼らは食べて満ち足り、肥え太り、そして、ほかの神々のほうに向かい、これに仕えて、わたしを侮り、わたしの契約を破る。21 多くのわざわいと苦難が彼に降りかかるとき、この歌が彼らに対してあかしをする。彼らの子孫の口からそれが忘れられることはないからである。わたしが誓った地に彼らを導き入れる以前から、彼らが今たくらんでいる計画を、わたしは知っているからである。」22 モーセは、その日、この歌を書きしるして、イスラエル人に教えた。」

神はイスラエルの民に対して非常な怒りをもっておられます。このとき、今まさにモーセが死のうとしているのです。その時にモーセは神によって一人の後継者を得ました。ヨシュアです。そのヨシュアを祝して、そして、ヨシュアを率いてこのイスラエルが約束の地に入っていくそのことを話しているのです。その時に神がどのように言われたのか？イスラエルの民はどうなるのか？16節以降にそのことが記されています。神はイスラエルの民がヨルダン川を渡って約束の地に入っていく後、神に逆らうこと、偽りの神々に移っていくこと、そのような偶像崇拜の罪を犯すことをもうすでに知っておられるのです。そして、すべてのことがその通りになっていくのです。

モーセはこのようにを言います。29節「私の死後、あなたがたがきっと墮落して、私が命じた道から離れること、また、後の日に、わざわいがあなたがたに降りかかることを私が知っているからだ。これは、あなたがたが、主の目の前に悪を行ない、あなたがたの手のわざによって、主を怒らせるからである。」、皆さん、驚くべきことです。まだ約束の地に入っていないのです。このパウロの時代の千五百年前からそのことが神によって約束されていたのです。神がそのように罪を犯させたのではありません。神は全知のお方であるがゆえに、人々がそのように罪に至ることをちゃんと知っていたのです。

今日のテキスト、ローマ書10章に戻って、イスラエルが罪によって神にこのような「ねたみと怒り」を引き起こさせたように、今度は、神はイスラエルの民でない者たちを使って、イスラエルの民に「ねたみと怒り」を引き起こすと言うのです。19節に異邦人のことを「民でない者」と記されていました。神が選ばれた神の民でなかった私たち、また、「無知な国民」である、理解力がないと言うのです。無理解で愚かなことです。なぜなら、私たちは神の啓示をいただいていたからです。真理についても、神についても私たちは知らなかったのです。そのような私たちを神が逆に祝すことによってイスラエルに「ねたみと怒り」を引き起こすと言うのです。なぜ、神はこのようにことを為さるのでしょう？神はずっとこのイスラエルの民を愛して、このイスラエルのために、21節にあるように救いの手を差し伸べて来られたのです。しかし、イスラエルはそれに逆らい続けて来ました。

そこで今度神が選ばれたことは、このイスラエルの民に「ねたみと怒り」を引き起こすことです。今、私たちが見て来たように、異邦人が救われることは神が約束していたことです。ですから本来、その出来事を見るなら、彼らも神のみわざが成されていると喜ぶはずですが。約束されていることですから、彼らはその約束を知っているはずですが。ところが、イスラエルはこの神のすばらしい祝福が自分たちのものであるのに、それが他の人々に及んでいるのを見て「ねたみと怒り」を持ったのです。これは明らかにイスラエルの罪です。神が成されるその祝福を実際に目の当たりにして、自分たちはねたんだのです。彼らは自分たちだけが祝福をいただく、その資格がある、自分たちだけが神のご好意を受けるに相応しい者だと思って来たのです。ですから、それが他の人々に移ることに彼らは我慢ならなかったのです。実は、これも神の愛のみわざだったのです。ローマ11:14でパウロはこのように説明を加えています。「そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。」、つまり、このすべてのことも神がイスラエルを愛するがゆえに為されたみわざなのです。

このようにして、神は常にイスラエルに対して救いの御手を差し延べて来られたのです。でも、イスラエルはそれにことごとく逆らい続けて来たのです。でも、神はイスラエルを愛しておられるのです。そして同時に、私たち異邦人も愛してくださったのです。イスラエルが拒み続ける原因、それは11章でパウロが詳しく説明しますが、私たちにも神はこんなにもすばらしい祝福を備えてくださったのです。

約束されていたように、私たちもその祝福に与る者へと神が一方的にしてくださったのです。モーセが言っていたように、異邦人が救われること、そして同時に、イスラエルが心を頑なにすることをあなたがたは知っていたのではないかと、パウロはそのように言うのです。

2. イザヤ 20-21節

20節から今度はイザヤの証言に移ります。20節と21節で対象が変わります。20節は異邦人に対して、21節はイスラエルに対するものです。「:20 またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現わした。:21 またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」

(1) 異邦人：異邦人に適用 20節

まず、パウロは20節でイザヤが語ったみことばを引用しています。イザヤ書65：1のみことばです。「わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしはここだ、わたしはここだ。」と言った。」私たちはすでに、9：25で「それは、ホセアの手紙でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。」とホセア書から引用されていたみことばを見ました。私たちは神を求めていなかった、しかし、神は私たちにご自身を明らかにされたのです。私たちは神のことを尋ねていなかった、でも、神は私たちにご自分を示してくださった。つまり、パウロはここで、神はこのように私たちに対して恵み深いご慈愛に富んだ方であることを明らかにするのです。私たちが神を求めたのではない、神が私たちにご自身を明らかにしてくださった。

(2) イスラエル：イスラエルに適用 21節

そして、21節を見ると、今度はイスラエルのことが出て来ます。これはイザヤ書65：2のみことばを引用しています。「わたしは、反逆の民、自分の思いに従って良くない道を歩む者たちに、一日中、わたしの手を差し伸べた。」。見ていただきたいのは、20節では私たち異邦人は神を求めていなかった、でも、神が働いて私たちを救ってくださったと、神のみわざが記されていることです。神がイスラエルの民を愛して彼らの内に働きを為すのですが、21節にはその神のみわざに対して彼らが拒み続けるという選択をした人間の働きが出て来ます。私たちが救いを考える時に、私たちはこの二つのことをみことばから教えられます。あなたがイエスを信じたのは、神があなたのうちに働いてくれたからです。しかし同時に、神はあなたにこの救いを自分のものとして受け入れますか？この救い主を信じますか？と、私たちの責任を問うておられます。イスラエルの反応は異邦人のとは異なるのです。

(a) 神への彼らの態度

21節を見た時に、神の愛は変わりません。神はイスラエルの民を愛してくださった。「手を差し伸べた。」とあります。ところが、この民がしたことは神に対する「不従順」であり「反抗」と記されています。「不従順」、神を信じて従おうとはしないのです。神に反対し続けて行くのです。神がどれ程すばらしい祝福をもって祝そうとされても、罪の赦しを与えようとしても、イスラエルの選択は神に逆らい続ける選択なのです。イスラエルは福音を聞きました。彼らは異邦人の召しに関する神のご計画を知っていました。それでいて、彼らはこの神の救いを受け入れなかったのです。しかし、そのようなイスラエルの民を神は愛してくださったのです。

(b) 神のみわざ：彼らの態度を知った上でなおもイスラエルへ恵みを施そうとされた！

- ・手を差し伸べた
- ・神を拒む者への悲しみと嘆き

覚えておられますか？イエス・キリストがエルサレムを見て「エルサレムよ、エルサレムよ」と言って涙を流されたことを…。マタイの福音書23章37節「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」、聖書が教える神、すべてのものを造られた創造主、主の主、真の神はこのような神です。

《結論》

1. 罪のさばきを受ける原因は自分自身にある

神は私のような罪人を愛してくださった。神は、私たち罪人が神に逆らい続けて永遠の滅びに至ることを喜んではおられない、そのことに心を痛めておられます。パウロが言う通りです。1テモテ2：4「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」。神は私たち罪人がこの救いに与ることを望んでおられる、神はイスラエルが救いに与ることを望んでおられるのです。それほどまでに神は私たちを愛して救いの御手を差し伸べ続けてくださった。しかし、罪人はその救いを拒み続けたのです。

2. 神の約束は必ず実現する

(1) 神のさばきの現実

みことばが私たちに警告すること、21節にもあるように、神は確かに救いの御手を差し伸べてくださっていますが、それはいつまでも主は手を差し伸べているのではありません。「これまで！」というときがやって来るのです。神の忍耐には限界があるのです。ですから、聖書の中には何度も何度もそのことが警告されています。覚えていますか？イエスのたとえ話の一つですが、ルカの福音書13章にあります。13：6－9「イエスはこのようなたとえ話をされた。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。：7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』 8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。：9 もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」、あくまで例え話ですが、言わんとしている真理は明らかです。実を实らせていないいちじくの木があるのです。主人はそれを切ってしまうと言うのですが、番人は「もう1年だけ待って、もしそれで実が実らなかつたら切り倒しましょう。」と言います。つまり、罪人に対する神の忍耐です。「もうしばらく待つ」、それでも実を結ばない、それでもこの救いを受け入れないで拒み続けるなら、切り倒すと言うのです。

ルカ17章では、人の子がやって来る日についてイエスが話されました。17：26－29「人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。：27 ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついたりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。：28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、：29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。」、その日は突然やって来るということです。つまり、神が教えておられること、また、神が警告されていることは、確かに、今は神が救いの御手を差し伸べておられる。「わたしのところに帰って来なさい。罪を赦していただくためにわたしのところに帰って来なさい。」と、でも、それはいつまでも続くことではないということです。さばきの日が来ます。「もうこれまで！」と言われる日がやって来るのです。箴言29：1には「責められても、なお、うなじのこわい者は、たちまち滅ぼされて、いやされることはない。」とあります。

(2) 救いの現実：主の招きに素直に応じること！

だから、私たちはこの救いのメッセージを聞くときに、詩篇95：7－8に「きょう、もし御声を聞くなら、メリバでのときのように、荒野のマサでの日のように、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」とあるように、神が救いの御手を差し伸べてくださっているときに、心をかたくなにしてその救いを拒み続けることをしないで、その救いを求めて出て行くのです。ヘブル3：7－8でも「ですから、聖霊が言われるとおりに。「きょう、もし御声を聞くならば、：8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」とされています。

今日私たちは、イスラエルがこのようなすばらしい祝福を神から受けることができたにもかかわらず、拒み続けて来たその様子を見ました。何千年にも亘って、神はイスラエルの民を選び、彼らに対してすばらしい救いの御手を差し伸べて来られた。ところが、彼らは繰り返し繰り返し神の前に逆らい続けたのです。信仰者の皆さん、今私たちがこうして救われたことを喜び、この救い主を称えることができるのは、すべて神の恵みですね。神が一方的にあなたに働き、あなたを救いへと導いてくださった。あなたはこの救いのメッセージを聞いたときに、「はい、神さま。私の罪をあなたの前に悔い改めます。あなたを信じてあなたに従います。」と、その決心をして神と和解してこの救いをいただきました。

そのようなすばらしい救いをいただいた者として、あなたはその救いを感謝して、救いを喜んで、救い主を誇りながら歩んでいるかどうかです。私たちはだれ一人としてこのイスラエルを責めることはできません。そこに自分自身を見るからです。信仰をもった私たちも日々の歩みにおいてどれほど神の前に逆らっていることでしょうか。私たちはそのような不信仰な歩みを止めて、そして、神によって救われた者として、その神を崇めるにふさわしく生きて行くことです。それが必要だと思いませんか？

そして、未だ、イエスを信じておられない方がいるなら、神はあなたに対して救いの御手を差し伸べておられます。でも「いつまでも」、「永遠に」と約束されている訳ではありません。そのチャンスを逸する前に、この救いに与るために悔い改めをもって出て来ることです。神のすばらしい恵み、そして同時に、神が言われたことは必ずそのようになるということ、パウロはそのことを伝えたのです。現実が起こっていること、今、私たちが目の当たりにしていること、それは神が約束されたことです。ということは、これから後も同じことが確信できます。神の約束は必ず成るのです。そのような神を私たち

は信じたのです。信仰者の皆さん、みことばに立って、そして、歩み続けることです。未だイエスを信じていない皆さん、みことばの警告に耳を傾けることです。そして、この救いを今日ご自分のものとしていただくことです。そのことを心からお勧めします。

《考えましょう》

1. 自分の罪がさばかれるとき、その責任はだれにありますか？
2. 罪人が神の救いを拒むのはどうしてでしょう？
3. クリスマスは今日をどのように生きるべきだと思いますか？